

## 環溝住居址小論(四)

鏡山, 猛

<https://doi.org/10.15017/2332994>

---

出版情報 : 史淵. 78, pp.29-60, 1959-03-20. Faculty of Literature, Kyushu University  
バージョン :  
権利関係 :

環溝住居趾小論 (四)

鏡山猛

目次

緒言

第一章 遺跡の実例

第一 比恵 …………… 以上第六七・六八合輯

第二 北九州に於ける溝状遺構の諸例

第三 山口県下の条溝

第四 東海關東地方の諸例

補遺 (この項第七四輯)

第二章 遺跡の総括

第一 溝の形態

第二 環溝の年代…………… 以上第七一輯

第三 溝の性質

第三章 住居集団―溝内共同生活体―の性格

第一 墳墓にあらわれた集団生活…………… 以上第七四輯

第二 弥生期集落の集団性

環溝住居趾小論

## 第三 環溝住居の構造分析

## 第四 環溝遺跡と農耕生産

結語 (完)

以上第七八輯

## 第一 墳墓にあらわれた集団生活(前承)

以上福岡県銚田甕棺遺跡によつて墳墓群団の構成段階を區別したが、類例は他にも見出される。かつて須玖甕棺遺跡についての考察を一言したことがあるが最近この遺跡地の土採り作業が行われ甕棺の密集区が少くとも二つに別れていたことが明<sup>(註二)</sup>になつた。

昭和四年京都帝大報告書の附図によるB区<sup>(註三)</sup>に接して数個の例が発見され、それより西方約一五米の間には一個の甕棺も発見されていない。この空隙地帯より西方断崖にかけては更に多数の発見があり、墓域は明白に二つの地区にわかれてゐる。両区に於ける甕棺の様式上の差は前後がつけ難い。此処では幅約一〇米程度の採土作業であるので、この程度しかわからぬが、広域に亘つて発見されている甕棺がすべて間隙なしに密集状態を示すものとは考えられない。又須玖遺跡に於て注意すべき住居趾も甕棺遺跡の北に小学校が新設されるため地ならし作業中に発見され、墳墓と住居趾との立地關係の一端を知ることが出来た。須玖甕棺地帯の北端は何れの地点まで延びているかは全面的な発掘が行われていないので不明であるが、東西道路の南側面断崖には戦後道路拡張の際露出しているところを突見することが出来た。道路北側舌状台地の末端に於ては、その西端部に京都帝大の発掘の結果では、弥生式土器の包含層を発見しているけれども、甕棺の検出はなかつた。この台地末端は現在畑地となつていて、概観すれば北に向つて漸次低くなり水田地域に連つてゐる。もともと特に著るしい自然の断崖は見られない。従つて半ば水田地帯にかけて新設された小学校の敷地は北端の畑地の土地をけ

ずり取つて水田地域が埋め立てられた。その際僅か一米以下の削土であつたが、弥生式土器の散布する状態が見られ、豎穴もいくつか検出されている。同時に一条の溝が注意され、環溝の存在を物語つていようである。現在運動場の北端にその一部を残しているが、溝の上面が幾分かカットされているにしても、発掘調査の機会があれば、たしかに環溝の状態が検討されることと思うが、今は露出状態からみて環溝や住居趾の存在を注意しておくに止める。これもかつて弥生式墳墓と住居趾の關係を論じた時に予想していたことで、このたび前の推測が誤りでなかつたことを知つた。勿論小学校敷地に露れた住居趾は土採り面積も少いため僅か数例であるから、須玖住居趾の全部とは思われないし、又既往発見の何れの壙棺群と連結するものであるかは明かでないにしても、住居趾発見の弥生式土器様式と一致する壙棺群の存在を確認出来ることからしても、須玖壙棺遺跡に於て夫々の墳墓集團は近在の住居集團の夫々と有機的關連を持つてゐることは否定することが出来ないであろう。以上は単に最近の土採り作業によつて点検された事実であるが、遺跡は古くから知られ世の注意をひいていた所である。将来組織的な學術調査によつてより正確に墳墓と住居趾の關係を把握する必要がある。殊にこの小論によつても、有力な資料を期待することも出来よう。

次に最近九州大学考古学教室で調査した福岡市フクオカ日佐原の弥生式墳墓遺跡によつて墳墓集團のありかたを検討しつづけよう。

昭和三三年六月末に鈴木基親氏より日佐原から漢式鏡——内行花文鏡——管玉切子玉の出土したしらせを受けた。この地は福岡女学院の移転先敷地であり、ブルドーザで整地を急いでいることを知り県と連絡の上九大考古学教室で至急調査を行う手筈をととのえた。六月二十六日より旬余に亘つて女学院当局や工事関係者の理解ある援助によつて一応の完了をみた。詳細報告は別の機会にする予定であるがここでは墳墓群の分布図を示して解説を加えることにする。ここは須玖遺跡の西方約一軒の位置にあり、南北にのびた台地（比高約四〜五米）の脊稜地に連亘する墳墓集團である。幸に女学院の

移転敷地として墓域外に相当広い面積の土地が削り取られたので、墳墓集団の限界が明かにされた。墓域が敷地の中央部を占めていたことも幸であつた。このような広域地帯の調査は吾々が希望していた所でブルドーザーによる地ならし工事のため蓋石の移動破壊はまぬがれなかつたにせよ、墳墓群団は残りなく露出された。最高所にあたる墓域は墳墓下底より数米地下げが行われるため、調査後破壊されてしまつた。

発見された墳墓の種類は甕棺はただ一基で、他は箱式石棺と石蓋土壙であつた。今その総数を示せば

甕棺 一

石棺 一九

土壙 三二

墳墓の群団は挿図(第一図)によつて示すが如く、六のグループに分つことが出来る。C、DはE群と一括してもよいが今は別記することとした。

第一集団 甕棺 一

(A) 一二基 石棺 六

土壙 四

(外に箱式棺か石蓋土壙か不詳のもの一)

第二集団

(B) 一〇基 土壙 一〇

第三集団

(C) 二基 土壙 二

第四集團

石棺 一

(D) 二基

土壙 一

第五集團

石棺 九

(E) 二四基

土壙 一五

第六集團

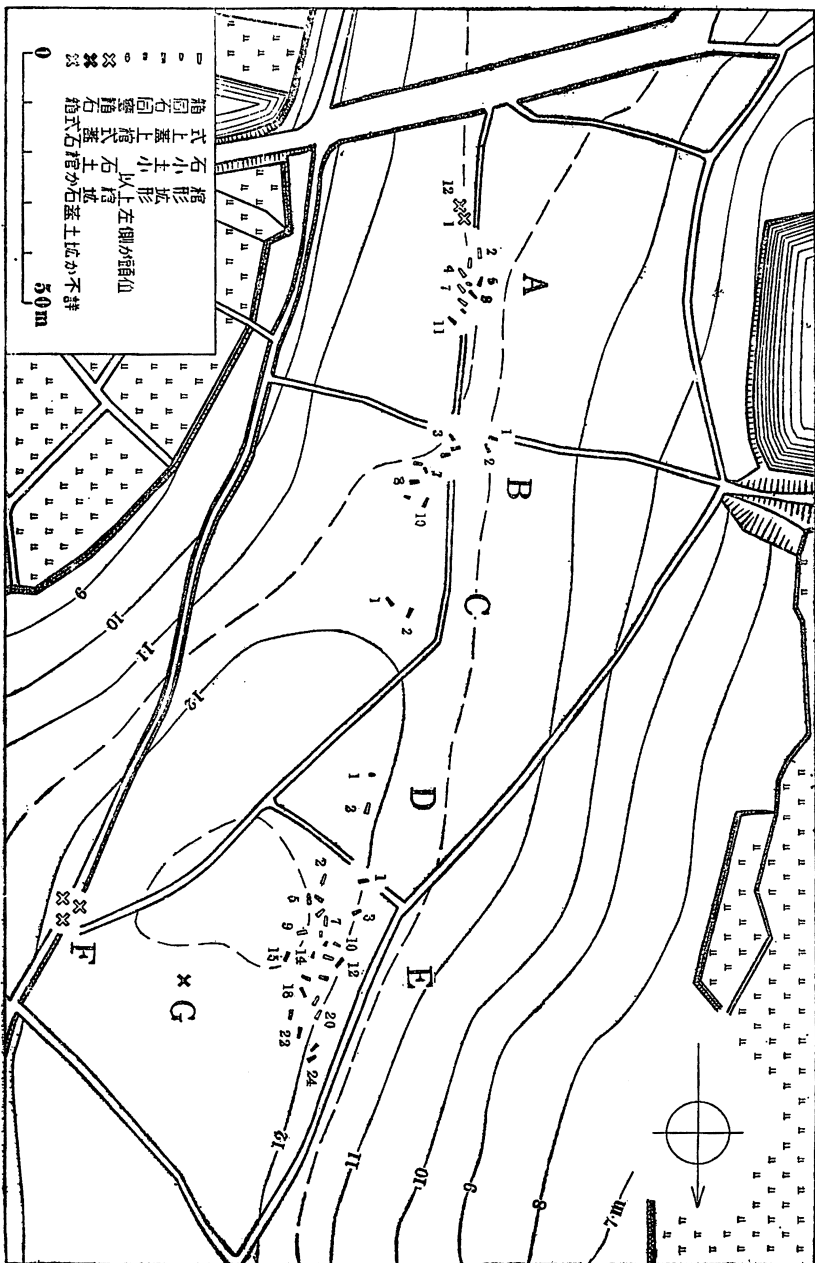
(F) 三基 石棺 三

以上六の集團に属し得ない墳墓はG号の土壙（石蓋）である。（別表参照）

各集團についてみると墳墓数の差が著しいことに気づく。第六集團では石棺三であるが第五集團にあつては二十四基を数える。これは墳墓の共有体そのものの強大さ、一般の戸数ひいては家族数——墳墓を営む習俗を持つた戸数乃至家族数——の多数、或は営造力の潜在量を示している。このことを確言するには、墳墓集團に時代差が認められず、又同時平行の時期に営まれたことが証明されねばならぬ。甕棺、石棺及び土壙が弥生式墳墓の三つの様相であることは現在北九州では明瞭に云えることである。但し甕棺をのぞけば、石棺及び土壙の年代による変化相——様式編年——は未だ充分には明かにされていない。従つてここで考えられる年代観は副葬品及び甕棺の様式年代によつて考えられる。以下に各項について概要を述べておこう。

1、副葬品としての遺物

この調査の端緒をなした鏡其の他の遺物は第五（E）群一五号の土壙より発見された。既に鏡は鈴木基親氏の検出した際は大部分がブルドーザーで運搬された土中から破片となつて採集されたため、原状を明かにすることが出来なかつたが、同一の破片が土壙内に残つていたことから、E—一五号土壙の遺物である事實は動かせない。又この土壙内遺物の他



第一圖 日佐原墳墓分布圖

には箱式棺（E—七号）を除いては副葬品と思われるものは発見されていない。

#### E—一五号の副葬品

漢式鏡一面——内行花文鏡（径一三、五釐）内区の四葉座間に「長宣子孫」の銘があり、八連弧をもつ舶載鏡である。様式から後漢代に比定されるもので、この土壙の上限年代を知る資料である。玉類——硬玉製勾玉二個はともに小形で、一は頭尾端がフラットで、他の一つは全体に平たく不整形な弥生期勾玉の特徴を持つている。水晶製玉総数二十一個のうちわけは、棗形のもの八個、算盤玉形のもの十一個、丸形（小形丸形）のもの二個である、以上は出土状態から一連の首飾りをなしていたものと思われる。他に所謂碧玉製管玉十四個があり、概して細形であるが径や長さは不揃である。穿孔は片ぐりである。管玉は腕にあたる位置から発見された。

#### E—七号副葬品

管玉九個——は前記のものに似た制形特徴を持つている。穿孔も片ぐりであるが、この方が前者にくらべてややひらき大きい。

鉄鏃四個——は平造の無茎で腹扶をもち柳葉形である。

鉄刀片——は刀身の断片四個を採集し得たに止るが素環頭の一部らしい鉄片があり、環頭大刀のうたがいがあある。

鉄斧一——は小形で（長さ六、二釐刃幅二、八釐）他に袋状の断片一がある。又鉞の部分らしい平板状の鉄片一がある。

通じてこの箱式棺の副葬品には鉄製品が多く、刀（環刀）鏃、斧等がある。管玉の共伴は土壙墓とのつながりを示すといえ、当石棺には小さな土盛りがあり、箱形の組石であることなどを考えあわせE—一五号土壙よりもやや降つた年代にあることを思わせる。墳墓数の最も多いE群にあつて、特に箱式石棺は十基のうち八基までが箱形であることも、舟形の多い他の群よりもおくれた年代のものを含む可能性がある。之も古墳期にくだしても副葬品は古墳時代の古期を基だし



く降るものではあるまい。

## 2、甕棺の様式

ただ一對の甕棺であるが、水平に近い状態で合口部の下辺が原状のまま発見された。上甕の下部は既に除去されて見当らなかつた。残存破片から復原すると、下甕は口径八二釐高さ約一、一米のもので口辺はく字形に内彎し口辺下に一条の凸帯がある。下腹部にも（全高の約四分一の高さ）凸帯一条めぐらしていて底部は丸底に近い。上甕は口辺復原口径約六〇釐となり、（高さは不明）下甕と比べて小形となる。接口部では小形上甕が口縁部を大形甕のなかに挿入していたので上辺に於て空隙をもつこととなる。上甕は口縁部は外彎して口辺下端に帯をめぐらし、下腹部にも帯を繞らすこと下甕と同様である。口辺部のそりと形に小差はあるが様式としては同一式と見てさしつかえない。弥生の終末期に近いものであろう。

## 3、土壙と石棺の類似形態

石棺の構築には先づ土壙を掘ることが前提作業である。けれども土壙は単に石棺構築の前段階に止り、石棺材を省略したものと簡単にかたづけられることは出来ない。曰佐原遺跡ではただ二例の副葬品を持つものが土壙と石棺であつたことも意味のないことではない。

先づ石棺の形態からみれば、長方形箱形のものが普通であるが、この遺跡の石棺の七例は正確に側石の並列が直線的でないことが注目される。石材は風化し易い花崗岩を用いかなり部厚いものを数枚並べているが、肩部が広く足部が狭くなっている。人骨の遺存するものが皆無なので、果して狭い方が足という確証はないけれども、他の遺跡の実例或は副葬品の位置から推測されることである。土壙に於て約八四%が舟形である。筆者はかつて土壙を船形、箱形と分類したことがあるが、これは舟形に近いけれども、このような人体の伸展仰臥にふさわしい肩部が最も広く脚部をせばめる形態は他に



資料があれば、一つの型としてとり上げることも出来よう。前述の如くしばらくE群を除いて見れば、ほとんどの土壙と石棺（舟形五、箱形一）がこのような類似平面形をとつていることはこの遺跡の特徴であり、両者の平行年代を示唆している。E群に於ては石棺の舟形、箱形の対比は逆になる（二対八）

以上各項に述べて来た諸關係を総括すれば、甕棺が弥生式後期の様式であり土壙遺物も亦同時期的な特徴を示し、土壙、石棺の形態類似による同時性も指摘される。ただE群に於ては石棺の副葬品其他の点から古墳期に下るもの若干を含んでいるようである。

曰佐原墳墓群A群の東南約一〇〇米にある幼稚園構内より多くの甕棺が工事中見出されている。中期様式の甕棺ばかりでこの墓域はここであげた時期と異つた姿を示すことを記しておく。

さきに鉾田遺跡では一群団の数は十基以内とし、教集団が一墓域をなすことを指摘した。新しい曰佐原の知見によれば、集団間に大小差が著しいことがわかる。第四群の如き大きな集団墓の発生は、一集団のものが比較的長い年代にわたつて累加して分裂することなく増大した疑がある。これに対して小集団のものは他の大集団より分裂して生成されたものか、その發展経過の詳細に関しては容易に知ることが出来ないが、<sup>(註五)</sup> 时期的に見ればより短期間に営まれるものであろう。

甕棺の群団に興味を感じてかつて本誌に二三の例をあげたこともあるがすべてこの密集状態を示すものとは限らない。

そして又密集というより凝集という言葉がよりよく表現する状態のことも少くない。曰佐原遺跡の六群団が一集落の墳墓の凡てを露呈したものが知り得ないにしても、少くとも五十教基の墳墓群が形成されたことを知つた。或はこの外に鉾田の遺跡の示す如き別の大区域が発見されるかも知れない。その暁には

大区—中区—小区の三段階区分が鉾田とは同様な結果を示すであらう。

以上最近の新発見の遺跡による知見を加えて、弥生式墳墓の詳細性について述べて来たが、小論の目的はこれ等の群団

が集落—環溝住居趾—と如何なる關係に置かれるかということにあつた。比恵遺跡に見る所では甕棺の群団は幾つかの環溝住居体の共有する性格を持つものであつた。ここでは一環溝内住居体が一群の甕棺を所有する關係は成り立たないようである。比恵に於ては環溝住居趾の調査に比べて甕棺の広域調査は行われていない。従つて一墓域の甕棺群が幾つかの集団にわかれて、最小群団が環溝の総合生活体と結びつくか否か明かにされていない。今仮に最小群団を十基とすれば累計死者一世代十人として現在の平均小家族人数の二戸分にしか相当しない。勿論北九州といえども死者がすべて甕棺に葬られたのではないことは筆者の持論であり、この数は決して一環溝住居者の墳墓としても少数にすぎることにはなからう。既に実例をあげた如く、環溝の面積にも大小があり、溝内生活共同体そのものにも大小の別があることをうかがわせる。十基以内の墳墓は自然の最小家族の累代埋葬によつて生れたものでないことを教えるものである。即ち環溝内住者の分析によつて得られる一戸の墓地が最小群団を示すものでないことを示している。むしろ環溝内の扱ばれた家の扱ばれた人が甕棺埋葬されたとする説をとるならば、最小群はむしろ環溝内の一居住群団乃至は同じ性格を持つ居住群団のそれに比定するが妥当であらう。こう考えてくると前に推考した

『大区——集落、中区——環溝、小区——戸』の關係は次の如く改められねばならない。

中区——小数の環溝群によつて現はされる居住群団の墳墓

小区——環溝居住者の墳墓

そして大区は小數環溝群の集團をあわせた——又は大集落という言葉が許されるならば——一つの大集落が持つてゐる墓地であることが明かとなる。

註

①⑤史淵第五三輯鏡山「甕棺累考」——その群団と共有体」

② 昭和三年春日北小学校新設のため此処の土をとつて敷地の盛りが行われた際の知見である

⑧ 京都帝国大学文学部考古学研究报告第十一册

「筑前須玖史前遺跡の研究」

④ 史淵第六五輯 鏡山「石蓋土壙に関する覚書」

## 第二 弥生期集落の集団性

環溝内に居住する生活体は共有する倉庫井戸、時には窯などがあることを知つたが、その構成人員が持つところの経済的な共同性と共に、環溝は生活本処の区劃として精神的な共同感にまで到達したのである。溝内の家が現実には竪穴として現れる場合、そこにはやはり一溝一家という概念とは別に溝内の構成戸の存在も認めざるを得ない。各戸間の主従関係政治関係は弥生一般の社会構造と家族構造を明かにしなければ、明確な理解に到達し得ない。吾々は幾つかの遺跡とこれに関連する遺物によつて弥生期の社会相について若干の知見を持つてはいるけれども、これを適用して、溝内生活共同体の組織を再現するにはなお若干の不安を感じる。ここでは一般住居の家のあとと考えられる竪穴が一溝内にある場合に、大小の差が特に認められないこと及び一定の中心家屋をとりまく配置でないことを指摘するにとどめよう。勿論弥生期に於ては或程度の社会階層が認められ、大は国家組織から小は家族組織間にも社会生活に於て支配者、被支配者の関係が否定されるものでない。一面にはこのような階層の存在が指摘されるが、一方では日常の物質的生活面に於ける優劣の差の少いことも考慮されねばならぬだろう。吾々は共同体の具象的な指標として墳墓をとりあげたが、更には生産ことに農耕や、祭祀などについても考察をめぐらす必要があるだろう。

次に弥生式住居の集団性—家の凝集する遺構—について既往の調査例をあげて、環溝を伴はないが実質的には同じ生活共同体が存在していたことを注意しておこう。その第一例は大分県安国寺弥生遺跡<sup>(註一)</sup>である。ここでは自然の泥壕によつて囲繞された住居区があり、住居区内に三百本ばかりの柱穴があり、凝集家屋の存在が推定された。南北約一八米東西約三

〇米に亘つて柱穴は密集しているが、中央には東西方面に細長い道路ともいふべき空隙地を残している。これ等の柱穴は各々の家の区劃を明瞭にしていなければならないが、弥生後期の高床家屋の集団が或は杭上住居のような同一床上の群屋を想像することも可能である。住居群をとりまく低地を吾々は周濠とよんだ。この濠は旧河道の埋没によつて出来たもので、弥生末期には一種の泥濘で所によつては低湿水田ともなつていたと想定した。同様の周濠によつて囲まれた住居集団が散在していたことを知つた。この遺跡では短い時期に各家の隣接する所からこれを各家の機械的な近接とは考えずして一つの共同生活体の構造と理解した。高床構造の性質上、竪穴住居にみられるような倉庫などは識別出来なかつたし、井戸も又発見し得なかつたが、一面からみれば、周濠内に余裕のある広場すら持ち得なかつた濠内の住居は更に隣接戸の共同感を助長するものであつたであらう。

第二例は安国寺報告書にも附記しておいた福岡県遠賀郡水巻町伊佐座の遺跡である。同遺跡でも、近接柱根によつて高床建築群の存在を見るので、凝集家屋の存在を推測出来る。時代は安国寺遺跡とほぼ同じ頃の弥生後期の住居遺構とみられる。この柱根は地盤が特に軟かな遠賀川の氾濫堆積土上に建てられたもので、低湿と水害を予想して高床が出現するのは自然のことであらうが、柱根は枕木を以て支える特殊な考慮がめぐらされている。この住居趾の全域がどの位か全面調査を行つていないので不明であるが、南北一〇米東西三五米の範囲に四〇本以上の柱根が特に疎密の分布を示さずして直立している。又家屋群の周縁を取まく溝や濠の存在も実証されていない。この点は環溝住居の類例と比較しても、単に家屋群の凝集性を物語るに止まるようである。このような類例を求むれば更に多くの追加が出来よう。一般に弥生期の集落については、住居の近接と占地面积の広大が指摘されている。所謂大集落と呼ばれるものが、精密な調査をすれば、家の集合状態は全域に密度が均一でないことは勿論であらう。ただこの場合に環溝の遺構が残っている所では集落の構成要素が明瞭に区分される利点がある。

環溝遺跡の実例はここに取あげた弥生文化期に属するものの外に、土師器等の出土する古墳期より奈良、平安時代にかけてのものもある。以下に諸報告に見る弥生期以降の環溝遺跡例を列記してみよう。

1、福岡県山門郡瀬高町金栗 史淵第六六輯

2、同町 鉦田 実査

3、福岡県三藩郡筑邦町西原 実査

4、東京都中野区川島 ミネルバ ドルメン四・七

5、東京都杉並区方南 上代文化第二十

6、東京都中野区富士見台 考古学年報昭和二四年度

7、埼玉県所沢市北野 武蔵野史談

8、栃木県芳賀郡芳賀町坪之内 下野史学第八号

9、神奈川県横浜市都田中学校 銅鐸一一

環溝住居趾の実態はこれ等の原史及び歴史時代に降つたものとまとめて考察する必要がある。環溝住居の共同体的性格もこれ等の総合的な考察によつてはじめて明らかにされるであろう。ここでは一応は弥生期の遺跡に限つて考察の対象とした。何れ別稿としてこれ等の古墳期以降のものはまとめる予定であるが、かつて本誌第六六輯にあげておいた福岡県山門郡瀬高町金栗の環溝遺跡を対象として対比してみよう。<sup>(註三)</sup>

弥生期の環溝といえども、一辺の長さのわかるものは比恵遺跡のそれの他には少い。比恵遺跡では一辺十米のものから九十米に至るまで大小の遺構がある。これに対して金栗のものは一辺四〇米余りである。他に比恵の小環溝に類するものも或は大環溝に類するものもわかつていない。又一辺の長さ面積はわからずとも溝の断面についても極端に大きなもの或

は小なるものも見当らぬ。古墳期以降のものが弥生期に比べて環溝の規模が均一化するという傾向が見られる。前記各遺跡の実態と比較することによつてこの結果を検討すべきであるが、今はすべて後日を期することとする。

溝内に発見される遺構は井戸、竪穴、炬跡の類であることは両時期とも同様である。夫々の構造には又時代的な特徴が現われるが、溝内居住の生活の要素としては現在の所大差が認められない。このような集団住居が外観の上から類似形態をとつているという以上に内的な居住性格に何等かの変化が認められるか或は異質的な内容を持つものであるかの問題に對しても将来にその解決を期するより他はない。

筆者はさきに奈良時代の環溝例をあげて戸籍帳に見える戸の内容と関連せしめて、一応の溝内居住集団の性格を推測した。このような単婚家族を示す家戸の集団による家族的な性格が弥生期に既に發生していただであらうか。私自身は簡単に溯源的な関連を従来考えていたが、その当否を決するには更に検討を要する。この問題に對しては、家族の構成に関する社会組織の歴史的变化を示す知見が必要となつて来る。奈良時代と弥生期との間には四―五百余年の距りがある。その間に如何なる時代変化を示しているかが問題である。ただ弥生の初期より末期に至る迄少なくとも數百年の間の全期を同一性格と規定すれば、以降のこの五百余年間はさして問題とするに足りないかも知れない。ところが原史時代に記録として現れて来る氏族社会が家族構成の問題と如何ようにからんでくるか、或は又古墳文化の表徴する豪族階層の一般社会に与えた影響を考えて来ると問題は簡単でなくなつてくる。

註

① 九州文化総合研究編「大分県安国寺弥生式遺跡の調査」

② 史淵第六六輯 鏡山「奈良期の集落遺跡について」に概要説明をした



### 第三 環溝住居の構造分析

比恵の環溝四例については、最小一辺一〇米の方形のものから最大九〇米に及ぶもののあることを指摘した。九〇米の環溝が方形をなすか否かについては、溝域の調査をしたわけではないから確かなことは云えないが、他の環溝例から推して恐らく同様の形態をなしたものと推測される。すなはち比恵の一辺長の概数を列挙すれば一〇米、三〇米、四〇米、七〇米、九〇米となる。最小一〇米方形のものを一単位とすれば面積にして夫々八倍、四九倍、八一倍となる。

比恵の型例に近いものは戸張の内溝一米×一三・五米、次は同じ戸張の外溝一辺二四米というのがあげられる。環溝の延長、面積を知るには僅かの例であるが、大小不揃であることに気付くのである。最小一〇米のなかに二つの弥生期竪穴が遺存していたことは時期を異にした一つの家であるか、同時存在のものであるか問題であるが、単婚家族の独立家屋として考える可能性もある。ここで想起されるのは、戦時中福岡県甘木市馬田（もと朝倉郡馬田村）上原に於て調査された弥生式住居址である。この調査は同地の太刀洗飛行場拡張工事中の発見で、当時朝倉中学在勤中の金子文夫氏によつて行われた。戦時中で場所柄正式の写真測量を許されなかつたが、覚書と見取図がある。

この地方の地山の沖積土は黄褐色を帯び、被覆土は黒色の火山灰質のものであるから、沖積土層の中に掘り込まれた溝なり竪穴は被覆土を水平に切りとれば、黒色土がつまつた状態ではつきり現われる。ここで金子氏によつて観察された竪穴群団の概要を述べると、一辺約一〇米の方形環溝が整然と二列に配列されていた。竪穴群の中央に通路があつて、その両側に同じような規模の竪穴が並んでいたというのがその骨子である。この遺跡は極めて興味のある事実を物語っている。当時の悪条件のなかでの調査に貴重な観察をされたことを感謝しているが、正確な実測図がないことは何としても残念である。将来再調査によつて残存遺構だけでもつきとめておきたいと思う。時期は出土遺物に弥生中期様式を示

す所から、比恵と大差ないと見られる。ここでは環溝住居のように大形溝があるのでなく、小形環溝住居趾が集団をなして一つの群集家屋を構成していたのであつた。ここで又注意されることは集団構成の各環溝の規模が均一であることである。これ等の豎穴を含んだ環溝住居は、恐らく単婚実族の形態であることが想像される。住居趾の調査に於て豎穴の場合、その周辺敷地というものを考慮に入れると、この例から考えれば一アール程度の敷地は当然ではなからうか。そこで環溝の最小例は一つの家屋又は小家族一戸の敷地としてその極限を示すものとみて差支ないと思われる。もともと豎穴住居趾ではその周縁に小形の溝をめぐらすものがあり、縄文期では排水、排湿、又はかき根の根がため施設と考えられているが、同様例は弥生期にも若干あげられる。しかし弥生期の周溝については排水湿の他には考えられない。外寨、それは人であれ獣であれ、防衛の目的に全然効果がないこともないが、柵でもとりつけなければ安全は期し難い。防衛手段が小家族の一戸に限られるようなことは弥生期に於ては例外的なことであろう。それは排湿施設にしても現実的な効果としては家の独立、家の占地の明確な指標であり、精神的に溝内は他からの侵入を排除し、己が所有を主張する占有区域と考えられる。

比恵第一号環溝の大きさは一辺約三〇米の方形で、その面積は小環溝一アールの九倍で小環溝内の居住家族を一戸とすれば九戸分である。前にのべたようにその豎穴では四―五の豎穴が同時存在し得ることを見た。其の他共同組織が大きくなればなるほど、共同施設も増加することであるし、各々の家や集団の事情によつて等比級数や、等差級数のように機械的には出来ない。ただここに比恵の例に従つて一応の目安をたてる参考のため、仮に級数的な増し方をするとして、環溝の面積と家屋数の対表を示しておこう。

環溝番号

一辺の長さ

面積

家数Ⅱ等比級数の場合

同上等差級数の場合

五号

一〇米

一アール

一

一

一号	三〇米	九アール	四(五)	四(五)
三号	五〇米	二五アール	七(九)	一〇(二三)
二号	七〇米	四九アール	一〇(二七)	一九(二五)
四号	九〇米	八一アール	一六(二五)	三一(四一)

広域地内の家屋実数の調査は実際問題としては遂行の機会が極めて少いから、当分は推論の域を脱しないであろう。このように環溝住居の大部分は家屋集団という具体的な構成で示されるが、住居群団の大小の例が増加した場合、環溝規模の統計ピークがどの辺に位置するかを考察することは、現在の段階としては困難である。ここではまず最大級の環溝住居集団について検討をすすめることとしたい。

今のところ比恵遺跡の第四号八一アール程度のものを最大の例とする。板付の溝も不整形でかつ溝の延長の完全調査が行われていないが、環溝ですれば、この程度はあるであろう。条溝或は土塁によつて区切られる地域については、前にあげた左記遺跡に於て次のような広さを示す。

11 岡ノ山	約三〇アール
12 天王	約六〇アール
5 篠隈	約九〇アール
補1 岡原	約一ヘクタール

安国寺の場合、周濠内域は西の限界をつきとめることを得なかつたけれども、南北幅平均一八米東西約三〇米程度で調査区の面積は約五〇アールである。ただしこの遺跡は家屋集団の配列の仕方が他の環溝住居と異つて疎散な分布でなく、柱穴の密集状態からより凝集的な傾向がみられる。遺憾ながら西の限界がつきとめられていないので五〇アール以上としか云えない。

ここにひいた諸例によつて、環溝の広さはほぼ一ヘクター約一町程度を以て限度とすることを知る。一ヘクターに及ぶような広域の家屋集団は、それが他の集団と区別される地域に限定される場合には、一つの村落集落と呼んでも都合ではないであろう。

吾々の知見に入つた最大級の環溝又は類似遺跡をふくめて、小は単独家屋から、大は一つの集落に至るまでの間に、何れの大きさにも偏在することなく、大小の環溝住居が弥生期に存在したことになる。将来資料の増加によつて周溝の規模についてどの程度の面積のものが多くなるかは予言出来ないが、大小の広い幅差のあることは否定出来ない。そこで再び最広域の集落的性格を持つ遺跡の検討を進めておこう。

地理学的な解釈によれば、集落とは単に家屋の配列や集合散在の關係のみを意味するのではなく、耕地や道路および水路そのほか人類の居住に伴う文化景観の総合に対して与えられる名称といわれる。しかし常識的には、集落の語は都市に対して村落を意味し、家屋の集合単位を指している。ただしその集合の限度をいづこにおくかについては、個々の場合に對つては必ずしも容易に区別出来ないこともある。住居集団のなかには幾つかの集団要素が内在している。例えば環溝によつて区別される住居集団、墓域を共有する墳墓集団などがあつて、何等かの紐帯によつて結びつけられた群団がある。地理的な分布に於てもこのような集合状態の区分は必ずしも一定することは困難である。換言すれば広域に集落をとればその構成要素としては幾つかの小集落の集合であり、小集落は又幾つかの家屋集団の集合である。ここに問題にしている環溝に大小がある以上、当然環溝住居は大小に応じて集落の構成要素として二のタイプを示すことになる。

第一類 独立の集落が一環溝（乃至は類似遺跡）によつて代表されるもの

第二類 大小の環溝によつて一集落が構成されるもの

第一類に類するものは岡ノ山、篠隈のような溝でなく条溝と自然地形によるもので、類例として周濠内の安国寺住居趾

などがみられ、又板付の住居遺跡も恐らくはこの類型性格を持つものであろう。そしてこの類型の環溝によつて示される占有面積の最大限度は一ヘクタール程度の広さを占める。

ちなみに安國寺遺跡では凝集家屋群団が散在していることを推測したのであるが、これ等の各群団は独立の共同体であるけれども、孤立する群でなく、互に関連する更に大きなムラの構成分子であることが予想される。凝集家屋の各群の分布状態は調査された現況から観察すれば、かなり疎散の状態を示している。各群の間をへだてるものは広い泥濘状の低湿地であつた。凝集群団を一つの住居単位とすれば、田深平野のムラは一種の散村的性格を持つている。地理学上の散村の構成要素はこのような凝集家屋の大きな集団をさすものでなく、小形一戸の住宅地である。田深平野に散在するこれ等の住居群団のあり方は農耕生産の形態を考える場合によい参考となるので、更に後で触論する所があろう。

第二の類型に属するものは比恵の弥生期集落である。大集落に最も多いタイプであらう。これは集落の面積が一ヘクタール以上に拡がることもある。しかも安國寺例にみるような各集団は疎散な分布を持つものでない点が注目される。広域の住居集団である点は都市的な傾向さえもみせるけれども、その構成要素である各環溝の独立的な性向によつて統一的な規格にまで発展することは困難であつた。この時代の大集落はやはり単なる村落的な住居集団の膨脹によつて出現したものであり、各環溝内の住居団を超えた強い統制によつて居住地を配置するものではなかつた。それは各の環溝の形態やその規模に規格がみられぬということによつて理解される。環溝の群団については、既に墓域の共有という観点から少くとも二重の性格を持つてゐることを指摘した。このような習俗や婚姻関係からみれば、なおいくつかの羈絆の紐帯があつて、各環溝相互の結合は幾つかの強弱の因子によつて結びつけられていることと思う。ただここにそれ等の無形的な因子について考古学的な実証をなし得ないことを恨みとする。

比恵遺跡については、これまで調査の結果を同時並存的な平面の姿でながめすぎた観がないでもない。環溝の築造が同

時期になされていても、家族や氏族も個人と同じく動体である。にもかかわらず、溝をめぐるして居住地を限ることは動体の制限を意味する。溝内の居住員の増加は新しい居住地への分裂をきたさないわけにいかない。ここに環溝の大小による不均衡な勢力関係が生れ、更に又広域にわたる村落の連合体を基盤として政治的な支配権が発生する温床をこのような大集落が提供する機運が生れる。

最後にただ一つの例であるが、第三の類型としてとりあげれば前記甘木市上原の例がある。第一並びに第二の類型に於ては溝内の各家（戸）のむすびつきの強弱はともかくとして、共同敷地として、環溝内或は条溝によつて限られる一つの地域を持つものである。これに対し第三類型では屋地は各戸の占有であり、その整然たる規格配列によつて一つの集団を形成するものである。

以上弥生期の集落について環溝住居の観点から三つの型をわけてみた。このような色々な居住群団をみるのは、この時代の集落発展に複雑な因子のあることを物語るようである。もともと一つの時代に住居集団の様式が一定されているとは限らないけれども、その複雑な姿のなかに発展的な傾向を把握することも必要である。考古学が史学である以上は同一線上に並べられた幾つかの要素についても、発展的な理解にまで導かれるかどうかを検討しなければならない。そこで前記の幾つかの遺跡について、出土物、伴出土器様式年代を考えてみよう。

先づ第一類型に属すると思われるものの中に前期（或は更に遡つた板付期）のものがあるが後期に属するものが多い。安国寺遺跡も集落の分布のしかたからこの類型とされる。

第二類型は比恵の例で中期、

第三類型もやはり中期と推定される。

僅かの類例からすれば、弥生の古い時期に既に大きな村落集団を出現させている。その発生の事情については更に縄文

期に遡つて考察せねばならぬが、今はその余裕がないので他の機会にゆずる。中期以降ではその大規模な集落機構がそのままつづいてゐるけれども、居住群団の大きさは小形化し単婚家族の敷地独占をみる。更にはそれ等の独立小家族の連合体による集落が出来る。しかしこれ等の傾向は弥生期の類例が稀少である今日の状態から立論したもので、将来遺跡の調査例が多くなれば改められるかもしれない。更に又発展的なこの系列をたぐるには前時代と後統の時代の傾向とも考え合わせる必要もある。ことに後統時代では古墳期—奈良期—平安期に及ぶ数例の遺跡が知られているので、この發展仮説は別稿に於て更に検討を重ねようと思う。

#### 第四 環溝遺跡と農耕生産

弥生期の住居集落を問題とした時、その地理的な集団状態は或程度究明された段階に達したが、農耕生活と密結すると考えられる弥生式文化期にこれ等集落の耕地所有關係については、未だ之に応える充分の資料が揃つていない。近年共同体理論への強い関心から、日本でも古代村落の共同体構造について幾つかの試論が行われている。特に日本古代の生産機構についての研究は今日の研究段階では未だ考古学的資料によつて多くを望むことは出来ない。

環溝住居趾の共同体的性格はその地縁性と血縁性の双方に関連する居住地占有の形として一応納得されるけれども、農耕地所有の問題になると明確な判断が筆者自身としてつきかねてゐた。すでに共同墓域の所有原体である集団に対しては共有体という字句を用いた。世帯共同体又は村落共同体についても環溝の性格がその何れとも密接な関連を持つことに異論はない。筆者は環溝内居住集団がその居住敷地を共有するというごく限られた事実から、居住共同体というような生硬な字句を用いることもあつた。村落共同体といはず居住共同体としたのは村落構成要素としての共同体を考えただからである。広義に解釈して環溝内の家屋群が共同体であり、更に又環溝群が共同体的な性格を持つことを推測することは当然であ

あるが、更にその共同体制を土地所有、殊に水田耕作と生産機構との関連に於てどのような理解するかについては、以下に僅かの資料から試論の域を出ない考察を試みようと思う。

すなわち、究明のいとぐちをみつつける意味で二つの関係資料を提供しよう。その一は農耕地と集落地の相互関係で、その二は住居群と倉庫の關係である。

第一に弥生期の農耕のうち最も問題になるのは、稻栽培であり、環溝住居が水田耕作と深い関連を持つことはその立地状況からも想像される。弥生期の水田が所謂低湿地に所在していたことは、登呂の水田趾の調査以来特に強調されている所である。安国寺遺跡でも集落は泥濘状の湿田のなかに営まれている。水害や湿地の悪条件にもかかわらず、低平地に住居が位置することは、水田の管理に便宜であることが第一の理由であると考えられる。水田開拓期の事情を推考すれば、屋敷の周辺に拡がる低湿地に適當の水路をつけ、過度の水湿を排除し必要に応じては部分的給水路の施設もなしたものであろう。このような大規模な土木工事は大量の労働力を必要とする。登呂遺跡における数万本に及ぶ矢板列の配置、安国寺遺跡に於ける給排水溝の掘さく等の工事は恐らく他の低湿地に於てもなされたであろう。これ等は小家族の労働力を超えるものであり、食糧を水稻に依存する度が増加すればするほど共同作業が望まれよう。しかも給排水の路線の決定は同一区劃の水田では統一ある計画がなされねばならぬ。計画の施行と大量労働力の集結は開拓期には特に重視されたと思われる。この必要性が水田耕作での共同作業の能率向上と相まつて共同体的な社会結合を助長したと考えられる。弥生期の水田が既述のように低湿地に扶ばれたのは、初期農耕の傾向であろう。平地が山地と同様に森林や藪でおおわれていた状態を想像すれば、沢地や低水湿地を開墾の第一目標にし、次でやぶや森を切り開いて灌漑水路を設けての乾地農法に移ると考えるのが順序である。これには更に大きな統制を持つ共同作業が必要であろう。乾地水田（低湿地と區別する意味で以下乾田と略称する、畑地稻作の意味ではない）の起源が何時かについては直接これを実証する遺跡は見当らない。近



時弥生期の鉄製利器の資料が増加し、住居趾から出土する木製品、木器、建築材、矢板等大形木材の加工にも鉄器の使用が推察される。この点からも森林の伐採、水田開拓への途が開かれる。又灌漑水路の掘さくにしても同様である。そこで環溝自体もこの灌漑水路と同様の形態をとつて掘開ることが出来るから、若し比恵の最大級一辺九〇米に及ぶ大環溝をほる労働力と等しい力があれば、方形と側定して三六〇米に達する直線水路の開さくは容易である。ただこの場合、水源となる本流の水位、溝の深さ、地盤の質など、より高度の技術が必開となる。このような環溝と同一の規模を持つて掘開された灌漑水路を安国寺遺跡に発見し検討した。<sup>(註一)</sup>

ここでは約五〇米にわたつて灌漑水路の一部を見たが溝底には水流によつて運ばれた砂の推積があり、上流から下流に向つて緩傾斜を示す溝底のレベルを注意した。ただその時期は弥生の終末期から土師期の初に比定される土器片を残している所から調査の対象とした住居趾が後期——安国寺様式——を中心とした時期よりもややおくれたものと考えられる。

次にこれも断片的な資料であるが、重要な遺跡が沼津市から報告されている。<sup>(註二)</sup>

沼津市西椎路字目黒身(愛鷹中学校々庭)の弥生遺跡は、小野真一氏等によつて昭和三年に調査され、校庭で竪穴趾と東西に長くのびる排水溝が注意された。小野氏は排水溝と名付けておられるが、「住居趾の南側に接近してほぼ北西より東南に直線状にのび、約四〇米にわたつて追求し得たが、なお双方に延々としてのびていることが確認された。溝の深さは一、二米上縁幅平均一米断面V字形をなす」。そして溝の「下方には有機質の青黒色の粘土が推積し、その下は暗褐色の細砂層で、水路であつたことは明瞭である」とされる。この溝の形状が吾々の取扱つて来た環溝の所謂V字溝と規模の似たものであることに気付く。又出土遺物の関係からこの遺跡が全体として単純な土器様式を示し、竪穴と共に溝も又弥生後期の遺構であることを示唆している。

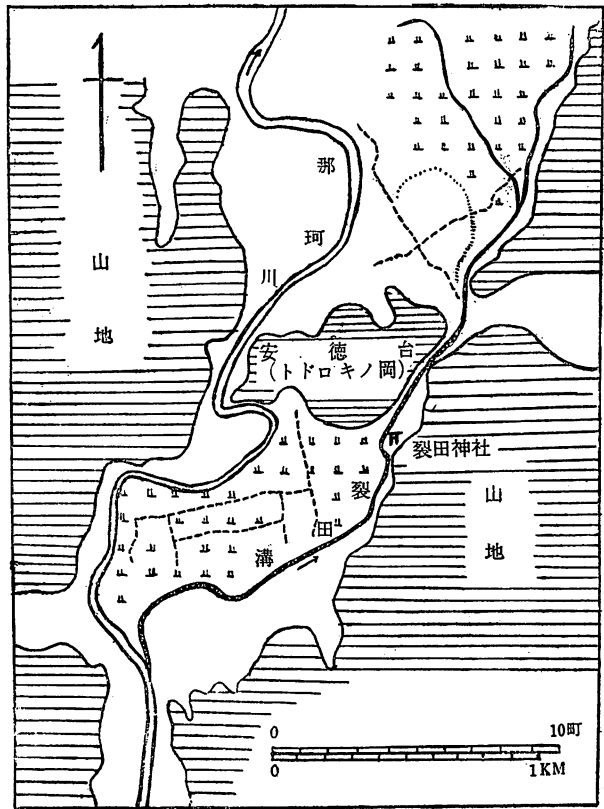
次に排水溝の走向について観察するに、東西方向はE 28° Sを示す。この偏度はあたかも当地域一帯にその痕跡を残

している条里区劃の方向にはば一致していることを特記したい。この地は愛鷹山の南麓の傾斜変換地にあたる所で、山麓の扇状地で水田を得ようとすれば、どうしても灌漑水路掘さくによつて乾田耕作を行わなければならない。自然の水路は愛鷹山の山陵を南下する幾つかの谷川が平野に流れ出て地形に従つて南北に平行し駿河湾に流入する。従つて給水路をつけるとすれば、この谷川の水を東西の方向に分流させる必要がある。恐らくはこの排水溝は灌漑水路の幹線と思われる。この水路の掘開年代は弥生後期で安国寺よりも少しく遡つた時期に求められる。

次に文献的資料によれば、日本書紀（神功紀征韓説話の項）に述べられる次の記事が注目される。

「既にして皇后、即ち神の教の驗有ることをしるしめして、天に神祇をいのりまつる。躬ら西を征ちたまはむと欲して、爰に神田を定めて佃る。時に儼河の水を引かせて神田に潤けむと欲ひて、溝を掘り、迹鷲岡に及びて、大磐塞りて溝を穿ることを得ず、皇后武内宿弥を召して、劍鏡を捧げて神祇を禱祈み溝を通さむことを求めしむ。則ちときに電雷霹靂して、其の磐を蹴裂きて、水を通穿さしむ、故人其の溝をなすけて裂田溝といふ。」

この説話の示す所は、骨子としては儼川の水をひいて開田した際トドロキノ岡の磐を神に祈り、感応によりて水を通じたということであるが、幸に説話によつて示された遺跡が残つている。儼川は博多を儼原といひ博多の港を儼津という例によつて、那珂川をさしていることは疑いない。トドロキノ岡は現在安徳台と呼ばれる岡であり、サクタノ溝は現在裂田神社の側を流れている。この流路は那珂河の水を分流させて、延々として掘さくされた人工による水溝で、今日なおこの地方の灌漑水路として利用されている。恐らく川幅は後世拡げられても、流路はたいして変化しないものと思われる。この水路の開さくによつて安徳台の南側盆地約三〇町歩と北方の広い地域が乾田化された。このような説話の生まれる原因には、水の配分にあつた神事など考えられるが、物語られる年代については神功皇后の時代とは断ぜられぬ。この水によつて潤される南方の水田地割が下流域の条里と異方向になつていことから、大化以前の開さくであることを示してい

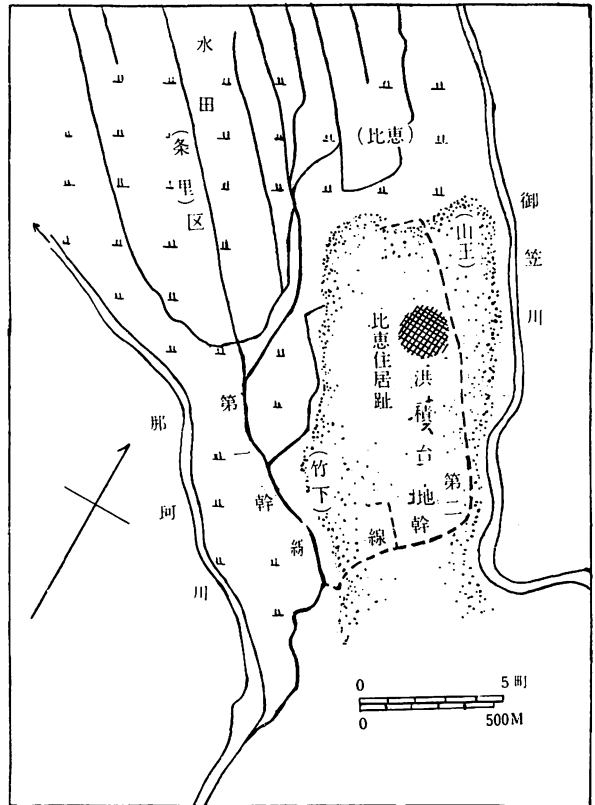


第二図 裂田溝水路図

る。それ以上、何時頃まで遡るかにについてはなお直接遺跡の調査検討に俟たねばならない。

次に弥生期の環溝遺跡の立地と水田遺跡の関係について考えをすすめてみよう。第一に比恵遺跡の地形環境は洪積台地の上にあり、水田は住居趾より比較的是なれた地域にある。弥生期の水田の所在を後代の条里区劃の明瞭な地区内以外には想定出来ないことは既に簡単に之をのべた。現在はこの地方の多くの耕地が失われて住宅地と化しているが、以前の灌漑水路をしらべてみると、御笠、那珂

両川の間にはさまれている比恵周辺の水田は実は那珂川より水をひいているのである。当地域の灌漑水路には二つの幹線がある。その一つは比恵高地の西を北方に流れて東折し、台地の北辺及び西辺一帯の水田をうるおすこの幹線水路から分岐する支流は一町（一一〇米）間隔の平行形をとっている原態を止めている。第二幹線は源流は第一幹線と同一であるが丘陵の中を東に流れ、御笠川の近くで北に折れて台地内の低い部分に若干の水田を開き台地の北方に流れて北辺水田に注ぐ形勢にあり、先の第一幹線と連絡する。即ちこの二つの幹線は同一水系から分岐したものであるが、第二幹線は第一よ



第三図 比恵遺跡周辺水系図

も、沖積地を開折して流れる所から周縁地より水流は低位ならざるを得ない。このような条件から考えれば、水田地割り  
 が、条里制に基く水路線とは同一でなかつたであろうが、水田として開拓するには灌漑水路を必要とする。このような灌  
 漑水路の掘開は、前述のように、弥生後期に於ては既に可能の段階に達する諸条件をそなえていた。特に北九州の弥生文  
 化の先進地帯に於て、それは弥生式文化の最盛期と思われる中期まで遡ることは不可能とは云えない。それは社会集団の  
 組織と金属器の製作使用に於ての優位を考慮に入れての推論である。将来直接この可能性を実証する遺跡を求めたいので

りおくれた時期のものと思われる。この  
 第二路線沿いの水田は狭い新開田で難工  
 事であるにかかわらず、開田可能面積は  
 少い。この部分の水田は条里の地割形態  
 をとっていない。その水路は比恵遺跡の  
 東隅を通つて壟槽地帯との間を流れてい  
 るが、弥生期にこれ等の人工による灌漑  
 水路があつたとの証跡はみ出されぬ。こ  
 れに対して西辺―北辺の広域水田には条  
 里遺構が明らかである。此処では新に水  
 田として開拓するには乾田灌漑を必要と  
 するであろう。当時の那珂川本流の水位  
 は現在のそれよりも高位にあるとして

ある。御笠、那珂両川の河口近くの水田は、灌漑水路による乾田で、低湿地農法による可耕地はほとんどない。このような乾田耕作の事実が証明されるならば、広域にわたる比惠集落の発展も広大な開田耕作の要件として考慮されると共に住居集団をより強大にむすびつける結果ともなるであろう。

一方安国寺遺跡にみたような低地水田のただ中に立地する住居集団（仮に田深平野のムラの分核とよべば）が単位となつて分散する類型がある。比惠遺跡に於てはそれに比敵する広さを持つ大環溝が、他の諸々の大小環溝住居集団とつらなつて一大集落を構成している。安国寺類型の場合には凝集分類の帰属関係におかれるものと考えられる周辺隣接耕地がある。この関係はより小規模の村落においても同様であろう。ことに低湿地農法が分散する沼沢地―それは旧河道の遮塞されて出来たものと考えられる―の場合、水田一区は三〇〇余本の柱穴によつて表される居住共同体による用役で充分である。ただし新たな灌漑水路の掘開によつて更に広い面積の乾田地が開田となる場合には単一の分核での用役に止らず、より多くの勢力が之に作用することは論をまたない。以上隣接耕地と隔離耕地の区別があることを注意した。隣接耕地は住居趾を中心として耕地が四周にめぐらされる場合もあるが、一方だけに抜がる福岡県須玖の遺跡の如きもある。

須玖の遺跡の場合、墳墓地は熊野神社周辺の丘陵地上にまで延びているが、下段の畑地に最も密な分布を示している。小学校敷地はこの墳墓地の北に隣接した一区で、住居趾の一端を示している。耕田趾は更に北方の小川の流域に比定される。高低差を以て示せば、南端の高地が墓地であり、その北に隣接して住居趾があり更に北の低地に水田が営まれる。ただ住居趾と水田の関係については登呂遺跡も同様な関係である。ここに二つの代表的なタイプをあげて対比してみると

第一 比惠タイプ―耕田は居住地のまわりに遠くはなれる

第二 安国寺タイプ―耕田は居住地のまわりに近接する

となる。

この二つのタイプにはそれぞれの変種もあるであろうが、低湿地開拓期に於ては第一型の集落が生れる傾向がある。第二型にあつては集落の規模も大きくなり、第一型の分散した各々の共同体の大きさに比べれば、集約的な団村的特徴を持つことになる。比恵の台地は弥生期にあつては畑作以外には水田化されない状態におかれていた。ここに住居群団の規模と水田の開拓及び経営との相関々係を追求することが将来の課題となる。

以上地理的な立地関係から環溝住居遺跡と水田地との対比を考えて来たが、次に農耕收穫物の管理問題について若干の考察を加えておこう。環溝住居趾に於て倉庫の存在は当然注意される所であるが、環溝内に於ける高床遺構を倉庫と考える事も出来る。又袋状竪穴様式の遺構が山口県天王居住遺跡の一隅にあることは前にも述べてきた。一般に倉庫遺構の数は竪穴住居の数に比べて少数であるし、又倉庫に貯蔵される穀物の量についても正確な計量は困難である。倉庫の位置も竪穴に随伴する関係におかれるものと、住居趾から離れて集るものがある。後者は共有的な関係を一応考慮に入れることも許されるであろう。ところが一般の弥生遺跡に於ては居住遺跡と交つてか、或は別に袋状の竪穴が群在することがある。北九州に於けるこのような例を数例あげることが出来る。<sup>(注三)</sup>その代表的な例として福岡県京都郡犀川町犀川小学校々庭の遺跡がある。此処は犀川平野南辺の台地で、附近に弥生住居趾や墓地があるが校庭には円形のプランを持つ袋状の竪穴十数個が発見され、これが二、三個づつの集団をなしている。調査にあたらた田頭喬氏によれば須玖式土器を伴するたぬ弥生中期に比定されている。住居竪穴と袋状竪穴はそれぞれ群団をなしている。その相関々係は未だ明瞭でないが、ここではやはり複合しているようである。これ等の竪穴は一般住居家屋の竪穴よりも深く、下底部はやや上面よりも拡がった形態を示している。

次に住居趾から離れて存在する例は、福岡県三井郡小郡町三沢農業倉庫附近で今はほとんどこの倉庫建築のため土を採り去つて姿を失つたが、五つ以上の袋状の竪穴が出て来た。竪穴の中から弥生式土器の小片が若干採集されたが、何れも

遠賀川様式のものであつた。此処では未だこの豎穴に関連する住居趾が何処にあつたか明かでない。同様な袋状豎穴の例は三沢の台地上にも認められるので将来の調査の機会をまつて推論したい。

以上の諸例の豎穴に何が蓄積されていたのであろうか、穀物の残存する状態は確認されていないが、同じ型態の袋状豎穴に於て左記の遺跡では夫々炭化米の集積が見られた。

1. 福岡県八女郡長峯村岩崎（現八女市岩崎）

2. 同村吉田字上ノ畑（八女市上ノ畑）

3. 佐賀県鳥栖市田代梅坂

①は故中山平次郎先生の報告があるが②と③は筆者の実査によるものである。①及び②は弥生後期に属するもので③は弥生末期に近い土師期に入つたもののようである。③の例では穂先の揃つた米粒を大量に発見したので、穂のまま貯蔵したものであろう。元來土中に深く掘られた豎穴は湿気を含むので、米穀の貯蔵には不適當と思われるけれども、何等かの排湿施設をしたものか、現実には豎穴に充滿している蓄積状態が検査された。これからみて前記数例の袋状豎穴の用途も推察出来る。しかも群団をなして住居群と共存の状態であることを注意したい。ここでいう共存関係は同時期併存の意味で、正確には両者の随伴位置を明示するものは、住居と倉庫が混在しない場合は、近在の同期の住居群を持つ所の倉庫群とみることは疑をいれない。この関係はあたかも住居集団と墳墓集団との相関々係に似ている。ただこのような倉庫群の例は、墳墓群に比べて遺跡の数も現在の所少く、更に調査も充分でない。

次に立地条件からみれば倉庫群の所在地は共同墓域のそれに似た地形を択んでいることが注意される。即ち高燥の台地が扱ばれているが、これは土中に掘り込む穴であるから出来るだけ乾燥のよいことが必要な為であらう。倉庫群の所有原體は当然近在の住居趾と考えられるが、ここに想起される土俗の例は対馬の農村にみられるクラの群団である。対馬では、

村落の家屋集團地から離れて高倉（小屋）が一団となつて建てられる。

峰村木坂部落の例をとるならば東西に走る道路の北側と海岸に二六戸の家屋が線状に並んでいるが、それと対照的に南の山麓に小屋が立ち並んでいる。<sup>(註五)</sup>

ここではコヤの所有は各々の家戸の所有に属し、配列も村落に於ける家屋の配列に対応した順序にある。このような習俗は記録によつて中世期にまで遡るようであるが、弥生期の相似形態とどのような関係におかれるか明かでない。それは対馬のクラの発生起源にまで遡つて考えねばならない。ただ住居と隔離される原因としてそれが祭殿として利用され、又神域視される精神的な面から寺院や墓地とも共存するということにも特殊な考えが働いているとも考えられる。更に火災をふせぐため、或は又湿気の少い所という要因を満足させる土地が択ばれるとすれば居住地域とは別の区域につくられる理由も理解出来よう。その所屬所有関係については、独立性か共有性か弥生期の倉庫には未だ考察の要がある。耕地の所有関係とも相関連する問題である。

以上この項については、資料提示に終つた観があるが、文献的な資料にとむ古墳期以降の共同体の観察と結んで考察をすすめるようと思うものである。

註

- ① 九州文化総合研究所編「大分県安國寺弥生式遺跡の調査」昭和三十三年三月刊
- ② 小野真一氏「駿河湾地方の弥生式文化」昭和三十三年十一月刊
- ③ 袋状竪穴の遺跡例としては左記拙著に於て筑前七例豊前八例筑後二例をあげておいた
- ④ 「北九州の古代遺跡」昭和三十一年十二月刊  
考古学雑誌第一四卷第一号 中山平次郎博士「焼米を出せる竪穴趾」
- ⑤ 九州文化史研究所紀要第一号 喜多野精一氏「対馬村落の研究——対馬西岸旧神社領村落の社会構造——」



## 結 語

以上四回に亘つて連載した小論は弥生期の住居を対象として一応終結としたが、弥生期以降のこの種の遺跡の事例も年々増加している。弥生期のそれと原史時代―古代のそれとの対比なり発展段階を考えなければ、体をなさないのであるが、残余は次の機会にゆずつた。

小論の基礎を遺跡の考古学的な調査によつたため、資料は確実なものを扱ひたかつたが、列挙した各遺跡についてなお不十分な観察がまぬがれなかつた。これは集落遺跡のような広域調査が困難であるため必然的におこる欠陥である。資料の多くは断片的であり、遺跡の片鱗を示すものまで含めた為に、住居環溝以外の溝も含まれているかもしれない。これ等は将来の調査によつて補訂されよう。更にこの稿をつづけるうちに、新しい資料を知友から教えられ、又筆者自身関係遺跡の調査を継続中のものもある。第三稿に於て資料の二・三を追補した以外には新例は追記しなかつたが、須玖遺跡の住居趾が比恵同様の環溝住居集落の形態をとつているらしいことが明かにされた。これは北九州の代表的な遺跡地として知られているので、その住居趾との関係の端緒が開けた意味で本稿で骨子ばかりの紹介を試みておいた。

近年大きな土採り工事等で各時代の環溝住居乃至一般の集落の実例が増加している。環溝住居と溝を伴わない一般集落遺跡をどのように対比させるべきか、この点に関しては深く立入つて考察しなかつた。それは亦住居趾の集団的性格の考察を更に進めた上にゆずりたいと思う。

本稿の要点は、環溝住居趾に就て比恵遺跡を以て代表せられるように幾つかの家戸を構成要素とする住居集団の一地圖を示したものと解釈した。しかしこのような考えに対して二つの極界に於て考慮されねばならぬ点がある。その一つは最小限界の単独家屋（単婚家族住居）にも環溝があること、及び最大限一ヘクター（一町歩）をとる程度の大集落にも環

溝類似の施設があることである。この種の塁壕は防塞的な要素を多分に持つてゐるであろうが、ここでは単一独立の環溝を形成するもの―現状では環溝の語にふさわしい遺跡の調査が行われていない―が筆者は将来この種の遺跡が明かにされると思つてゐる。このような場合を考慮に入れて考えれば、環溝住居は団村的住居集団、又は相互に連関して一つの集落を構成する大小の住居集団だということになる。

環溝で囲まれた内域面積の大小は極めて不揃であることを見てきた。これは恐らく弥生における環溝の特性となるのであるまいか。ここには何等かの集落発展途上における社会的な原因が潜在しているように考えられるが、この問題もやはり前後の時代によつて明かにされねばならない。

後論に於ては二つの新しい調査資料を提示して墳墓と住居趾関係について論じたが、本論にそぐわぬ深入りした感がないでもない。比恵遺跡に於ては一環溝一墓域という形をとらず、数環溝群団で共同墓域をもつ姿がみられた。これを他の集団墓地に於て検討すると或は比恵の一群の墓域も現実には各環溝別のものに小区分されていたかもわからない。既に銚田遺跡の甕棺群集地に於てはほぼ均等大、中、小区の三段に区別されることを見た。更に臼佐原墓地では不均等な区劃ではあるが、一連の墓地にも銚田の中区に相当する状態をみてきた。この両墓地を作つた集落原体が環溝様式をなすとはかぎらぬと思うけれども、構造分析の結果を参考として提示した。なお墳墓に関連して、北九州の支石墓築造の社会的な基盤についても、環溝住居集団と考え合せられる所があるので一言すべきであつたが、このことは前に本誌上でふれる機会があつたのでくり返さぬことにした。最後に環溝住居の共同体的な性格と農耕（農耕地、開拓、生産、管理、経営、所有権等）の問題は構想未熟のまま僅かな資料から論をすすめたので後論を期したい。

## On Some Dwelling Sites Surrounded by Ditches (4)

by T. Kagamiyama

I have previously given examples of archeological investigations of ancient dwelling sites surrounded by ditches in northern Kyûshû, Yamaguchi prefecture, and the Kantô area. The present discussion deals only with such sites dating from the *Yayoi* period. The enclosures range in size from 10 square meters to one hectare. One cemetery might serve several enclosures, while a number of cemeteries were found dispersed throughout a large village. As in the case of large dolmens, which required considerable manpower, it appears that the members of the enclosures also must have banded together in cooperative efforts.

In the matter of cultivation of paddy fields, there seems to have been communal working of wet field surrounding the dwelling areas as well as communal working of dry field some distance away from the areas.